

銃のお手入れ

気をつけるべきことは？

Frank Schulz

Edelweiss Outdoor & Hunting — ハンター・シューター向け完全ガイド

はじめに

銃には自動車のような車検制度がないというのは、実は驚くべきことです。射撃試験に一度合格したら、あとはすべてあなた自身の責任です。それはあなた自身への責任であり、仲間の猟師への責任であり、そして獲物への責任でもあります。あなたの銃は時計のように正確に動作しなければなりません。狙った場所に確実に当てるために。それが「ヴァイトゲレヒト

(waidgerecht) ・猟道にかなった正しい狩猟」、つまり倫理的で公正な狩猟の基本条件です。

永続的な完全な機能と一貫して高い精度は、黙っていて手に入るものではありません。そのためにはあることをしなければなりません。それが定期的な銃の清掃と手入れです。ちなみに、これにはスプレッサー（消音器）も含まれます。

銃を最良の状態を守ってやり方をご紹介します。

なぜそもそも銃を清掃するのか？



クリーニングキット一式 — 銃の手入れに必要な道具がすべて揃った専用ケース

残滓がガス圧を上昇させる

発射の際、とりわけライフリングされた銃身（ライフル銃腔）は非常に大きな負荷にさらされます。高いガス圧によって弾丸が銃腔内を押し通され、その際にライフリングの溝と山に押しつけられます。このとき、弾丸の摩耗残滓が銃腔内に堆積します。1発の射撃ではまだわずかですが、時間が経つにつれて層が重なっていきます。その結果、銃腔の内径がどんどん狭くなり、ガス圧がどんどん上昇していきます。

火薬残滓が水分を吸収する

しかしこれは、定期的に銃を清掃すべき理由のひとつに過ぎません。もうひとつの理由は、発射薬が燃焼する際に銃腔内に残す残滓です。これらは吸湿性があります。つまり空気中の水分を引き寄せ、さらに困ったことに腐食性の物質へと変化します。そのため、これらの火薬残滓を銃腔内に長く放置してはいけません。さもないと孔食（ロストフラス）が生じる恐れがあります。

どのくらいの頻度で清掃するか？

ライフル銃腔をどのくらいの頻度で清掃すべきかという問いに対しては、意見が大きく分かれます。射撃のたびに清掃する人もいれば、年に一度という人もいます。さらには「銃腔は撃ちながらきれいになる」という危険な考え方を持つ人もいます。

真実はその中間にあります。まったく清掃しないことは間違いなく危険です。錆と高いガス圧の悪夢の組み合わせは銃身破裂を招く可能性があり、それは射手本人だけでなく周囲の人も危険にさらします。いずれにせよ、その前に精度が落ちます。

もちろん、毎回の射撃後に銃を清掃することは決して悪いことではありません。ご安心ください。市販の清掃用具を使う限り、清掃しすぎて銃腔を傷めるということはありません。

「撃ってきれいにする」	これは危険な迷信です。残滓は次弾では除去されません。
手入れを怠ると...	錆＋高ガス圧 → 最悪の場合、銃身破裂の危険があります。
清掃しすぎ？	市販の清掃用具を使う限り、過剰清掃で銃腔が傷むことはありません。
推奨頻度	30～50 発ごとに必ず化学的クリーニングを実施してください。

3 段階のお手入れ

清掃せずに撃てば撃つほど、いざ汚れを落とそうとしたときに残滓はより頑固にこびりついていきます。そのため、猟から戻るたびに少なくとも大まかな汚れを取り除くことをお勧めします。クリーニングロープを使えば、素早く手軽に行えます。

クリーニングロープとは、ウールワイパーと真鍮ブラシを組み合わせたようなものです。かさばるクリーニングロッドと違い、この柔軟なロープはいつでもガンケースやリュックサックに入れて持ち歩けます。

① 簡易クリーニング	フィールドで ― クリーニングロープによる素早い手入れ
② 標準クリーニング	自宅で ― ロッド・フェルト・オイルによる本格的な清掃
③ 化学的クリーニング	30～50 発ごと ― 溶剤による完全クリーニング

① 簡易クリーニング ― フィールドで

ボルト（遊底）を取り外し、クリーニングロープの重みのある真鍮端を先にして薬室（パトロネンラガー）に差し込みます。重力の助けを借りて、ロープが銃口から出てくるまで差し込みます。

次に真鍮のおもりをつかみ、ロープを一度手に巻き付けて、クリーニングロープをある程度の力で銃腔から完全に前方へ引き抜きます。銃腔が残滓から解放されるまでこれを繰り返します。通常、3～5回の通し引きで十分です。

次に銃腔内とクリーニングロープに直接ガンオイルを少量吹き付けます。そして再び2～3回引き通します。これで完了です。



クリーニングロープが汚れたら、洗濯機に入れるだけで OK です！



BoreSnake ― クリーニングロープ（ウールワイパー＋真鍮ブラシー体型）

作業手順

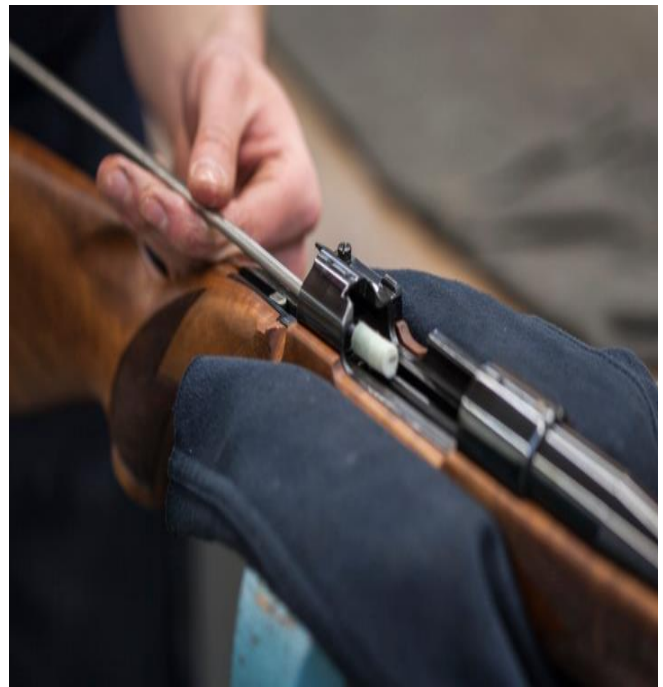
1. クリーニングロープの真鍮端を先にして薬室に差し込み、銃口から出てくるまで通す
2. ロープを手に巻き付け、ある程度の力で前方へ銃腔を引き通す
3. 工程を 2～3 回繰り返す
4. ガンオイルを銃腔内とクリーニングロープ・BoreSnake に吹き付ける
5. 銃腔を 2～3 回引き通す

② 標準クリーニング ― 自宅での本格的な手入れ

「ロープ方式」よりもさらに徹底的なのが、クリーニングロッドとガンオイルを使った銃腔清掃です。クリーニングロッドの先端に「ウェルク（Werg）」と呼ばれる繊維素材、または定番のVFG クリーニングフェルトを取り付けます。どちらにも専用のアダプターがあり、清掃材をしっかり固定できます。



一体型のクリーニングロッドは、分解式よりも硬く安定しています。



クリーニングロッドとフェルトストッパーによる標準清掃。薬室から銃口方向へ方向に押し込む

(左) 銃口から出てくるフェルト — この後取り外してからロッドを引き戻す (右) VFG Comfort フェルトストッパー (新品)

手順の詳細

フェルトストッパーをクリーニングロッドに取り付け、薬室から銃口方向へ押し込みます。最初の通しは必ずオイルなしで行います。火薬残滓を乾いたまま前方へ押し出すためです。クリーニングロッドが銃口から出たら、フェルトを取り外します。そのあとで初めてクリーニングロッドを慎重に引き戻します。

2回目の通しでは、クリーニングフェルトにガンオイルを染み込ませて同じ工程を繰り返します。フェルトが銃腔内にある間は、クリーニングロッドを前後に動かして清掃効果を高めることもできます。

乾燥フェルトとオイル付きフェルトの交互使用を、フェルトストッパーが比較的きれいな状態を保つまで繰り返します。通常は3～5回の通しで十分です。汚れがひどい場合は、途中でブロンズブラシまたは真鍮ブラシを使って頑固な残滓を落とします。



ブラシは必ず薬室から銃口方向への一方向のみ！銃口から出たら絶対に逆引き禁止。銃口部分を傷つけ精度が落ちます。



最後は必ず乾燥フェルトで仕上げる。オイル残滓による「オイルショット」（弾着点のずれ）を防ぐためです。

作業手順

1. クリーニングフェルトをクリーニングロッドに取り付け、オイルなしで乾いたまま銃腔を押し通す
2. フェルトを銃口で取り外し、クリーニングロッドを引き戻す
3. 新しいフェルトにガンオイルを染み込ませ、銃腔を押し通す
4. フェルトを銃口で取り外し、クリーニングロッドを引き戻す
5. 乾燥フェルトとオイルフェルトの交互使用を 3～5 回繰り返す（汚れがひどい場合はブロンズブラシを 2 回通す）
6. 最後に乾燥フェルトストッパーで仕上げ通しを行う。フェルトがきれいな状態であること
7. 薬室を布またはウェルクで乾拭きする

③ 化学的クリーニングー ポアディープクリーン

化学的クリーニングは本当に必要なのでしょうか？ 光に向けてみると銃腔が鏡のように輝いているのに、と思われるかもしれません。しかしそれは見かけ倒しです。あの美しい輝きは、銃腔に詰まった金属製の弾丸残滓によるものです。その下では銃腔が着々と錆びていきます。

ですから騙されてはいけません。化学的な銃腔クリーニングは避けて通れません。ただし難しいものではありません。オイルとブラシによる清掃との違いは、溶剤（ソルベント）を追加で使用するだけです。

溶剤の使用について

特に効果的なのはアンモニア含有製品で、従来のガンオイルとは異なり、トンバック・銅・鉛・亜鉛などの残滓も溶かすことができます。ただし刺激臭が強いため、作業場所は必ず十分に換気してください。



スコープ・ガンスリング・マガジンなど取り外せるものはすべて外し、ゴム手袋を必ず着用すること。木材・プラスチック・光学レンズへの溶剤の接触は厳禁。



化学的クリーニング用溶剤 — 30～50 発ごとに使用する本格的な銃腔クリーナー

Ballistol Filzreiniger Spezial .308（真鍮繊維入り）

2つの使用方法

方法①	銃腔を逆さまに立て、銃口を密閉して溶剤を満たす（Milfoam Forrest 等のフォームが便利）
方法②	フェルトストッパーに溶剤を染み込ませて銃腔を押し通す（BALLISTOL Robla Solo 推奨）



Robla Solo MIL を使用する前に銃腔を脱油しておくとも効果が最大化されます。射撃後にガンオイルをまだ塗布していないことを確認するだけで OK です。

浸透後の作業

10～15 分の浸透後、ブロンズブラシで銃腔を 3～4 回通します。銃口から溶剤が大量に飛び散りますので、空のプラスチックボトルを銃口にかぶせるか布を当てておいてください。

ブロンズブラシの使用後は、溶剤フェルトと乾燥フェルトを交互に通す作業を続けます。フェルトの青い染色（銅・トンバックが溶けている証拠）が薄くなるまで繰り返します。変色がほとんどなくなったらクリーニングは完了です。

仕上げとして、乾燥フェルトで 2～3 回通し → オイルフェルトで防錆処理 → 最後に乾燥フェルトで余分なオイルを除去します。外側も忘れずオイルで拭いてください。



BALLISTOL Robla Solo & MILFOAM Forrest®

BALLISTOL Robla Solo & Forrest MILFOAM ボアクリーニングフォーム 90ml — 泡状で銃腔内に浸透し残滓を浮かせる

日本では MILFOAM Forrest（ミルフォーム・フォレスト）のみ入手できる場合があります。

作業手順

1. フェルトストッパーに化学的銃腔クリーナーを染み込ませ、銃腔を押し通す（2回繰り返す）
2. 10～15 分間浸透させる
3. ブロンズブラシで銃腔を 3～4 回通す（飛散注意！布または空ボトルで銃口をカバー）
4. 溶剤フェルトと乾燥フェルトを交互に 4～5 回通す。フェルトの青色が消えるまで繰り返す
5. 乾燥フェルトで銃腔を数回通す。薬室も乾拭きする
6. オイルフェルトで銃腔を 2～3 回通す。薬室もオイル塗布する
7. 最後に乾燥フェルトで仕上げ通しを行う。フェルトがきれいな状態であること
8. 薬室を布またはウェルクで乾拭きする

ストックとスコープの手入れ

ストック（銃床）の手入れ

合成樹脂製のストックは特別な手入れは不要です。木製ストックには時折シャフト・ストックオイルによる手入れが必要です。これによりストックを湿気から守り、表面に絹のような上品なマットな艶を与えます。

- 亜麻布にシャフトオイルを塗り込む
- 約 1 時間木材に浸透させる
- 表面の余分なオイルを拭き取る



シャフトオイルはさまざまな色調で販売されています。意図的に木材を濃くしたい場合を除き、あまり濃い色調のものを選ばないよう注意してください。

スコープ（照準器）の清掃

ほとんどのスコープは軽金属製です。チューブ（胴体部）には特別な手入れは不要ですが、レンズのケアが重要です。保護キャップは基本的に高座（ハイジッツ）に上がるまで外さないことをお勧めします。

- ほこりはブロアーまたは柔らかいブラシで除去する
- 布やティッシュペーパーは絶対に使用しない（細かい砂粒でガラスが傷つく）
- 汚れはマイクロファイバークロスと光学クリーナーで拭き取る



光学クリーナーとマイクロファイバークロスによるレンズケアー スコープ・照準器のレンズ清掃に使用



レンズカバーは高座に着くまで外さない。メーカーのオプティッククリーニングセットには必要な用具が揃っています。

免責事項

本冊子は最大限の注意を払って作成されています。Edelweiss Outdoor & Hunting は、提供された情報の最新性・正確性・完全性・品質について一切の保証を行いません。情報の利用もしくは不利用、あるいは不正確および／または不完全な情報の利用によって生じたあらゆる種類の損害に対する賠償請求は、基本的に除外されます。